

「パリ祭」と子守唄 学生運動の嵐の中で

東京新聞 2023年7月9日 配信

「ジョン・レノン追悼集会」「キャンディーズ解散宣言」「尾崎豊のステージ飛び降り」…。幾多の伝説に彩られる日比谷野外音楽堂(野音)が今年、開設100周年を迎える。時代の断面を今に伝える残響の物語を証言でつづる。連載の初回は、加藤登紀子さんをめぐる「パリ祭」と「子守唄」のストーリー――。

台風一過の星空に高揚した声が響く。「歌手として最初に立ったステージが野音。一度、辞める時に歌ったのもここでした。もう戻っては来られないだろうとも思ったけど、復帰できた。野音のおかげです」先月初めに開かれた「日比谷音楽祭2023」。野音100周年を祝うステージにスペシャルゲストとして登場した加藤さんはそう話し、「Imagine」など3曲を披露した。何げなく言ったようにも聞こえる「もう戻っては来られない…」という言葉。実はそこにさまざまな感慨が込められている。加藤さんは1965年、野音で開かれたシャンソンの祭典「パリ祭」でデビューした。歌手石井好子さんがシャンソンの普及のため立ち上げたイベントで、フランス革命記念日に当たる7月14日に毎年、開かれていた。スター歌手だけではなく、日本アマチュア・シャンソンコンクールの優勝者にもステージが与えられる。加藤さんはその栄誉を得て、プロ歌手の道を歩み始めた。以来、「パリ祭」に出続けていたが、1969年に転機となる曲が生まれる。東大の安田講堂攻防戦など学生運動が頂点に達していた年だ。加藤さんの恋人で学生運動のリーダー藤本敏夫さんは当時、逮捕され拘留所にいた。ある日届いた手紙にこんな文面があった。「トイレの蓋ふたを開けるとよくネズミが顔を出す。ネズミ君が僕の親友だ」。この文章に着想を得て書いたのが「ひとり寝の子守唄」だ。その年の「パリ祭」で加藤さんはこの曲を歌いたいと石井さんに申し出た。シャンソンでなく、フォークソングであり子守唄だ。にもかかわらず、石井さんは「私はボブ・ディランも好きなの」と受け入れてくれた。当時、野音では連日のように集会が開かれデモの出発点になっていた。「『パリ祭』の当日も周辺でデモがあって、シュプレヒコールを聞きながら『ひとり寝の子守唄』を歌った」

3年後、加藤さんは、実刑判決を受け収監されていた藤本さんと結婚する。新たな生命も宿していた。出産も控え「歌手としての区切りをつけるためのコンサート」を野音で開くこととなる。「区切り」には「夫が実刑判決を受け、芸能界にはいられないという思いもあった。身を引く責任も感じていた」と振り返る。そんな考えをいさめたのが石井さんだった。「人生を決めなければならないほどの社会への責任なんてない。自分の人生は自分で自由に決めればいいの」

1972年7月25日、満員のステージで加藤さんは歌った。「野音はお客様の顔がはっきり見えるんで



野音100周年を祝う音楽祭で歌う加藤さん ©日比谷音楽祭実行委員会



今年6月の野音100周年を祝うステージ。11月までさまざまなイベントが開かれる ©日比谷音楽祭実行委員会



1969年9月、全共闘結成大会に全国から大勢の学生が日比谷野音に集まった

す。その多くの顔が最後の『知床旅情』では舞台上がってきて、皆で抱き合った。『元気な赤ちゃん産んで』『また歌って』って言うてる。歌手としてまた戻ってきたいと思った」その気持ちに従い復帰した加藤さんは、1974年から2000年まで毎年夏に野音でコンサートを開いてきた。1987年には当時のソ連からプガチョワさんをゲストに招いている。加藤さんが日本語訳でカバーした「百万本のバラ」はプガチョワさんの大ヒット曲だ。そんなロシアの国民的歌手も昨年、プーチン政権のウクライナ侵攻を非難して以来、表舞台から姿を消している。



1987年7月、野音でソ連(当時)の国民的歌手プガチョワさん(左)と「百万本のバラ」を歌う加藤さん

世界で分断と対立が深まり戦火も広がるなか、加藤さんが祈るような気持ちで歌うようになった曲の一つが「Imagine」だ。大空の下、国境も戦争もない世界を想像する詞——。加藤さんは日比谷音楽祭で歌い、ふと気づいた。「『Imagine』は野音がよく似合う。ボーダーのない空に、詞とメロディーが調和する感じで…」

文・稲熊均 ◇月1回、掲載します。

◆紙面へのご意見、ご要望は「t-hatsu@tokyo-np.co.jp」へメールでお願いします。

100年の残響 日比谷野音 story (2)

1975・8・15 琉球フェス「戦場の哀れ」島唄で

東京新聞 2023年8月13日 配信

歴史的な舞台なのにシャッターが切れない。「満席のスタンドは水を打ったように静まりかえっている。響くのは三線(さんしん)の枯れた音色と歌声だけ。皆聞き入っている。シャッターの音を出すのさえためらわれた」1975年8月15日に日比谷野外音楽堂(野音)で開かれた「琉球フェスティバル」。公式カメラマンとして撮影していた井出情児さんはそう振り返る。ステージから流れていたのは「ひめゆり部隊の歌」。男女の唄者(うたしや)が掛け合いで朗々と歌い上げる。「鉄より堅き大和魂の桜花」と始まり、「弾丸飛び散るその中で 艦砲射撃もなんのその」と続く。だが「勝たねばならぬ戦(いくさ)」の中で、食も水も尽き、郷土は焼け野原に。「散りて惜しまん若桜」「地下でともに泣くかしら さびしく泣いてる夏の虫」と結ばれるー。

このフェスをプロデュースしたのはルポライターの竹中芳さん(1991年死去)だ。大衆芸能にも精通し、返還前の沖縄に渡ると多くの島唄ミュージシャンと交流。琉球音楽の紹介、支援に力を注いだ。1974年には野音で第1回琉球フェスを実現させている。その翌年、あえて終戦記念日に開いた背景には、沖縄をめぐる当時の国策に対する竹中さんの「憤り」や「異議申し立て」もあったようだ。返還から3年のこの年、政府の「本土復帰記念事業」として沖縄国際海洋博覧会が開かれていた。竹中さんはフェスの解説でこう記している。「『海洋博』の何処にも沖縄の人口の3分の1を殺した



1975年8月15日「琉球フェスティバル」のフィナーレで三線を弾く「島唄の神様」嘉手苺林昌さん(99年死去)と観客ら=井出情児さん撮影



観客や演者とともにフィナーレで踊るフェスのプロデューサー竹中芳さん=井出情児さん撮影

(注・沖縄県の推計では県民の4分の1が沖縄戦で犠牲になったとされる)、あの戦禍の記憶を探すことはできない」華やかな展示や催しで、凄惨な地上戦や戦後の米軍占領下で沖縄の人々が味わってきた苦しみと覆い隠されかねない。そんな憤りを投影させたようにフェスは、司会も務めた沖縄ポップスの草分け照屋林助さん(2005年死去)の毅然とした一言で始まる。「琉球フェスティバル…戦争物語の始まりです」

冒頭の「ひめゆり部隊の歌」の後も戦中、戦後の沖縄庶民の思い、歩みを刻んだ曲が続く。「戦争をうらむ母」「国の花」「銃後の妻」「戦後の嘆き」「屋嘉(やか)節」「戦後の数え唄」…。「屋嘉節」は戦後、米軍のキャンプに強制収容された捕虜たちのやるせなさをつづった曲だ。舞台では、空き缶と棒で作った「カンカラ三線」を弾きながら、知名定男さんが歌った。「(捕虜を意味する)PWの服を着せられる屈辱の中でも、カンカラ三線を作り歌えば、人間らしい自分を取り戻せたと聞いています」。先人たちのそんな思いを演奏と歌に込めた。ファイナーレでは野音を包んでいたそれまでの静寂が一変する。テンポの速い即興曲が始まると聴衆がステージに上がり、踊り出したのだ。繰り広げられるカチャーシー。知名さんが印象深く覚えているのは「大勢のヤマトンチュ(本土の人)の方々も踊っていたことです」という。「島唄を分かってくれているのか不安だったけど、楽しそうな顔を見られてうれしかった」出演者の中では若手だった知名さんは後年、全国的な沖縄音楽ブームの立役者となる。竹中さんプロデュースの「琉球フェス」は1975年で幕を閉じたが、1995年に知名さんプロデュースで第2期「琉球フェス」が始まり、多くのスター歌手を輩出した。「若いウチナーンチュ(沖縄の人)に故郷へ誇りを持ってほしかった。誇りの一つが島唄。胸を張って歌えるようになってもらいたかった」竹中さんはフェスの企画だけでなく、膨大な数の島唄を収録、音源化し、日本全国に紹介してきた。琉球音楽協会の会長も務めた知名さんは「国内外で多くの人に島唄を聞いてもらえるようになった第一歩を竹中さんがつくれた。感謝してます」と話す。その音源化の中の一つに「戦場(いくさば)の哀れ」と題された8・15琉球フェスのCD(日本コロムビア)もある。解説文で竹中さんはこう記している。「(収録した)これらの曲は、“思い出のメロディ”ではなく…。今も響くメッセージであり、警鐘とも感じさせる。



「カンカラ三線」を弾きながら「屋嘉節」を歌う知名定男さん(左)ら=井出情児さん撮影



今年6月、野音で開かれた「琉球フェスティバル2023」。大工哲弘さん、夏川りみさん、パーシャクラブなど沖縄を代表するミュージシャンが出演した

1984・8・4 アトミック・カフェ 尾崎豊が歌った「反核」

東京新聞 2023年9月10日 配信

ステージ上の照明設備は高さ7mに組まれていた。「登り切った彼の表情を見て躊躇があると感じた。あの高さは下で想像するより怖い。リハーサルなどなく、衝動だったから見下ろして驚いたと思う。でも次の瞬間には飛び降りていた」1984年8月4日に日比谷野外音楽堂(野音)で開かれたイベント「アトミック・カフェ」。主催したプロデューサーの大久保青志さんはそう振り返る。「彼」とは尾崎豊さんのことだ。ステージで、2曲目の間奏中に「飛び降り」を敢行。その後、足を引きずりながら、予定されていた全4曲を歌い切った。「救急車に担ぎ込まれた時には気を失っていました。診断は左足の骨折でした」

このイベントは、核廃絶を訴える音楽フェスティバルで、「アトミック・カフェ」とは、核兵器の恐怖を記録した同名の米映画から取っている。音楽雑誌「ロッキング・オン」の創刊メンバーでもあった大久保さんはそのパイプも生かし、趣旨に賛同してくれるミュージシャンを募った。「苦労しましたが、加藤登紀子さんや広島県出身の浜田省吾さんの協力も得て実現できた」そんな中で、唯一、自ら出演を申し出たのが尾崎さんだった。前年末に18歳でレコードデビューしたばかりの新人で、フェスに向けての曲も作ってきた。それが飛び降りる直前、ステージでの1曲目に歌った「核(CORE)」だ。

「何か話をしよう…俺はひどく怯えてる」と始まる詞は、日常の奥深くに潜む不安を吐露する。終盤では「平和の中で怯えているけれど 反戦 反核 いったい何が出来るといふの 小さな叫びが聞こえないこの街で」と問いかける。大久保さんはフェスの半年後、発行する冊子のため尾崎さんにインタビューしている。当時は米ソの軍拡競争がピークに達していた時期だ。尾崎さんはこんな話をした。「今いちばん怖いものといえば第3次

世界大戦と核の存在です。うちは朝霞の基地(陸上自衛隊朝霞駐屯地)のすぐ近くで…環境的なこともあって割と小さい頃から核のことを考えたりしたほうかな。学校でも社会の授業で『俺たちに必要なのはそんなことじゃない』なんて食ってかかったこともあった」「商品として売られる音楽には、大切なものが失われているんじゃないかという気がします。僕はあくまで自分の本音を歌にしていきたい。僕の『街の風景』という曲に『誰もが眠りにつく前に』というフレーズがある。核で誰もが死んでしまう前にという意味をイメージして作ったんです。反核を音楽イベントで訴えるという大久保さんの企画のモデルは、ベトナム戦争に反対した1969年の米国「ウッドストック・フェスティバル」にある。「世界は変えられないだろう。でも音楽に惹かれて来たら、メッセージに共感して問題意識を持てたという人もいる。そんな出会いが増えればいい」と考えた。「アトミック…」は1987年で幕を閉じたが、東京電力福島第1原発事故の起きた2011年に日本最大級の野外ロックフェス「フジロック」を構成するイベントの一つとして復活。以来、毎



照明設備から飛び降りる尾崎豊さん＝映像から



飛び降りた後もステージで歌い続ける尾崎豊さん＝アトミック・カフェ事務局提供



「アトミック・カフェ」でトークコーナーに聞き入るファンら＝同事務局提供

年開催され、反核、脱原発、さらには沖縄の基地問題などをテーマに音楽やトークライブが展開される。「音楽に政治を持ち込むな」との批判もあるが、大久保さんはこう反論する。「政治的なさまざまな問題と、多くの人の日常は奥底でつながっている。歌に滲ませるのも表現の一つだし、何かを訴えるフェスに出る、出ないもアーティストの自由。『政治を持ち込むな』では多様な表現の場が制限されるだけだ」

尾崎さんの「飛び降り」の最中に演奏されていたのは「Scrambling Rock'n'Roll」という曲だ。「自由になりたくないかい」「自由っていったいなんだい」という叫びがリフレインされる。大久保さんは、26歳で急逝した尾崎さんの生き方について「自由の周辺には多くの壁もある。ぶち当たったり、葛藤も多かっただろう」と想像する。そんな「葛藤」も「壁」も「自由」も交差し、本音で描き合える「表現の空間」—。大久保さんが求め続けるフェスの姿でもある。



今年7月、尾崎さんの長男・裕哉さんが「アトミック・カフェ」のステージに初めて立ち、「I LOVE YOU」などを歌った＝GETTySBURG 提供

100年の残響 日比谷野音 story (4)

1977・7・17 キャンディーズ「解散宣言」 あの日の心残り 44年経て

東京新聞 2023年10月9日 配信

エアコンのなかった当時の楽屋には、大きな氷柱が運び込まれていた。伊藤蘭さんは今も、その日のその光景をよく覚えている。「暑くてスタッフの皆さんがときおり氷柱を触るんです。だんだん丸くなっていくのが印象的でした」

1977年7月17日の日比谷野外音楽堂(野音)。満員のスタンドはキャンディーズ登場を待ちわびている。熱気の中で、メンバーだけがひんやりとした緊張を心に抱えていた。解散の意思があることをファンは知らない。3人だけで下した決断だ。伊藤さんは「3人だからこそ出せた答えでした」と振り返る。「1人や2人だったら、誰かに相談して説得されていたかもしれない。3人で話し合い、納得できたから決断できた」そんな思いを投影するような宣言だった。ステージがフィナーレに近づき、伊藤さんが「皆さんに謝らなければならないことがあります」と切り出した。「9月で解散します」。藤村美樹さん、田中好子さんと肩を寄せ合い、涙を流してわびる。絶叫のようなキャンディーズコールの中、3人はスタッフに抱きかかえられるように退場した。人気絶頂期にあったアイドルの思いもよらぬ行動。衝撃は大きかった。携帯電話などない時代だ。会場周辺の公衆電話には、たった今、見聞きしたことを知らせようとするファンで長蛇の列ができた。翌日には緊急会見が開かれ、解散宣言に至った経緯が明かされる。3人が個々の人生を育んでいきたいと解散の意向を所属事務所に伝えたものの、それに対



1977年7月17日、野音ステージでのキャンディーズ。この後「解散宣言」をした。左から藤村美樹さん(ミキ)、伊藤蘭さん(ラン)、田中好子さん(スー)＝渡辺プロダクション提供



5万5千人のキャンディーズファンで沸きよならコンサート＝後楽園球場で

応する明確な答えが出ていない。解散の意思が固いのに隠したままステージに立ち続けるのは、心から応援してくれるファンをだましていることになる。それは耐えられない。決断の真意だった。

その後、事務所との話し合いで、解散はタレント契約の切れる9月ではなく、半年先送りされることとなる。ファンは全国キャンディーズ連盟(全キャン連)などが解散宣言を支持。最後のシングル「微笑がえし」はキャンディーズの曲で初のヒットチャート1位となった。1978年4月4日の「さよならコンサート」は後楽園球場に5万5千人を集める。3人は強烈なインパクトを放ちながら、4年半の活動に幕を閉じた。このステージを最後に歌手としては引退していた伊藤さんがソロデビューを果たしたのは2019年だ。キャンディーズの曲も徐々にコンサートで加えられた。「長い時間を経たことで過去に戻るといよりも、新たな気持ちで前に進める感覚を持てるようになった」と明かす。ただ、向き合わなければならない過去もある。2021年9月26日、野音でコンサートを開催。あの日にやり残したラストを取り戻した。「解散宣言があつて歌えなかった曲を、同じ舞台で歌うことができました」。44年前、ファイナーに予定していた「さよならのないカーニバル」。

3人が退場し、披露できなかった曲だ。「皆さんが拍手に思いを込めてくれ、熱を感じることができました」全キャン連代表で著述家・編集者の石黒謙吾さんは客席で聴いていた。「44年間もやもやしていた記憶のつかえがずっと消えたような感じでした」と話す。今年、伊藤さんにとって、



2021年9月26日、44年ぶりに野音で歌う伊藤さん＝トライサム提供

キャンディーズメンバーとしての歌手デビューから50周年の節目となった。各地を巡回した記念ツアーのファイナルとなるのが今月21日の野音だ。こちらは開設100周年。深い巡り合わせも感じるのだろうか、野音について伊藤さんはこんな思いを抱く。「かつて私たちが多くの人にショックな思いをさせてしまったにもかかわらず、再び立たせてくれて懐の深いステージだと感謝しています。都心にありながら緑に包まれ、空の下で時間の流れも伝わってくる。情景が溶け込んで、客席にいる方々の気持ちまで見えてくる気がするんです」自身にとって3度目となる歌の舞台には、どんな景色が広がるのか。「(ツアー中の曲目など)セットリストは変えませんが、野音ならではの味付けを考えています」とだけ明かした。

100年の残響 日比谷野音 story (5)

1971・7・28 岡林信康「狂い咲き」コンサート 貫いた 反骨の「私小説」

東京新聞 2023年11月11日 配信

岡林信康さんには一度しか着られなかったステージ衣装がある。「妻がその日のために『絞り染め』でつくってくれたんやけど、観客ともみ合いになってね。ぼろぼろになってしまった」1971年7月28日、日比谷野外音楽堂(野音)で開催されたソロコンサート「狂い咲き」。8千を超す観客は通路を埋め、ステージの上まであふれていた。「わけの分からないヤジを飛ばす奴らがいて、彼らのところに突進して行ってけんかになってしまった」と苦笑しながら振り返る。



ソロコンサート「狂い咲き」で歌う岡林信康さん＝本人提供

判然としないヤジの中身はともかく、当時、岡林さんとファ

ンとの間で緊張、葛藤があったのは事実だ。日雇い労働者の悲哀を歌った「山谷ブルース」で 68 年にデビューして以来、岡林さんは貧困や差別にあえぐ人々の心情や社会風刺を歌い、若くして「反体制の旗手」「フォークの神様」としてカリスマ的な支持を得ていた。しかし、ロックバンドをバックにした作品やラブソングを発表すると「こんなの岡林じゃない」「転向した」といった批判を浴びるようになる。

「自分にとって歌は『私小説』。山谷ブルースにしても、実際の日雇い労働生活から生まれた曲や。生きていって感じた疑問や湧き出てくる思いをつづって歌にしているだけ」。なのに学園紛争や労働運動の象徴のように偶像化され、そのレッテルに沿った歌ばかり求められた。苦悩が深まり、音楽活動から身を引く意思を固める。その前に自身の全作品を歌うという趣旨で開催されたのが、野音での「狂い咲き」だった。コンサート冒頭のトークで岡林さんは「『友よ』なんて歌まで歌いますし…。お互い恥ずかしい」と切り出し客席をざわつかせる。「友よ 夜明け前の闇の中で 友よ 戦いの炎を燃やせ…夜明けは近い」とつづられたこの曲は、デモ行動や政治集会で、抵抗や団結のシンボルのように歌われてきた。元来、牧師の息子として育った岡林さんが賛美歌のようなイメージでつくった曲だ。そこからは異なるメッセージが一人歩きし、作者を偶像化させた。歌う前に「問題の歌やね」と紹介すると、スタンドから「ナンセンス」「異議なし」といった言葉が飛び交うが、曲が始まると満席が聴き入り、歌い終わると大きな拍手に包まれた。これを最後に岡林さんは「友よ」を歌っていない。「フォークの神様」にケリをつけたステージだった。

音楽シーンから姿を消した岡林さんは山村での、いわば隠遁生活に入る。農業を営みながら目覚めたのが演歌だった。1975 年には世に出した「風の流れに」などが美空ひばりさんに歌われ交流、共演が続いた。1980 年代に入ると、日本オリジナルのロックを模索。民謡のリズムに韓国の打楽器などを融合させた独自のロック「エンヤトット」を創出した。2007 年には 36 年ぶりとなる野音の舞台上、エンヤトットを中心にソロコンサートを開いている。多様な音楽を生み続けてこられたことについて、「『フォークの神様』らしさを求められ、それをぶち壊そうという思いがあったから創作意欲が湧いた。今にして思えば、レッテルのおかげだろうね」と話す。一昨年に出したアルバム「復活の朝」では、かつての「反体制の旗手」をよみがえらせたような曲もある。「アドルフ」は、「強い指導者を求めている人たちがいる」「悩み迷うのが面倒で全てを任せたい」と歌い、「アドルフ・ヒトラーもどきが ニヤリと微笑んだ」と結ぶ。タイトル曲「復活の朝」では、人類がいなくなったことで輝きを取り戻した地球を描いた。根底にあるのは今の人間社会への疑問と危機感だ。「今夏の『沸騰化』で誰もが感じたはず。地球はもたない、と。でも政治は目先の権力に執着しコップの中の争いを続ける。だから戦争もやまない。このままでは地球がぼろぼろになってしまう」アルバムの締めくくりに収められたのが「友よ、この旅を」だ。あの「友よ」の続編であり、アンサーソングでもある。現在ツアー中のデビュー 55 周年コンサートでも歌われている。「陽(ひ)は沈み陽は昇る 歩いてゆこう…友よ」とつづられる。「『友よ』では夜明けが来れば希望が訪れると歌ったけど、夜明けの後も黄昏が来て、また夜が訪れる。それを繰り返すのが人生だ」との思いを込めた。貫いた反骨の「私小説」も完結に近づいている。岡林さんデビュー 55 周年記念ツアーの最終公演は 12 月 7 日、江東区住吉の「ティアラこうとう」で午後 6 時開演。問い合わせはティアラこうとうチケットサービス＝電 03(5624)3333＝へ。



2007 年、36 年ぶりに野音で行ったコンサートの様子



先月、横浜市で開かれたデビュー 55 周年記念コンサートで歌う岡林信康さんは岩本健吾さん撮影

1980・12・24 ジョン・レノン追悼集会 時空を超えて「ヘイワ」届け

東京新聞 2023年12月10日 配信



野音で開かれたジョン・レノンの追悼集会=いずれも1980年12月24日撮影

◆日本語で遺した肉声メッセージ ジョン・レノンが日本語で語りかける希少なメッセージ・テープがある。「世界の平和のために手をつないで歌いましょう。ヨーコと私とあなたと『ギブ・ピース・ア・チャンス』」言葉に続き、ギターを弾き「ギブ・ピース…」のさわりを歌う。邦題は「平和を我等(われら)に」。1969年にリリースされ、ベトナム戦争への反戦歌としても歌われるようになったジョンの代表曲のひとつだ。このメッセージと歌声が、夕暮れの日比谷野外音楽堂(野音)で流されたことがある。1980年のクリスマスイブ。その16日前の12月8日に暗殺されたジョンの追悼集会でのことだった。主催したのは日本におけるビートルズの公認ファンクラブ「ザ・ビートルズ・クラブ」。代表の齊藤早苗さんは、こう振り返る。

「(暗殺の)ニュースが流れた直後から、追悼の場を求めるファンの声が絶えず寄せられました。そんなとき思い出したのがジョンのテープでした。1969年に『日本の皆さんに』とクラブに送られてきたもので、メッセージを多くの人に届けたいと思い、その年の12月24日に日比谷野音で『ジョンとヨーコの呼びかける平和集会』を開いて、テープを流したんです。追悼の場でも、ぜひまた、このメッセージを伝えたいと考えました」くしくも11年前と同じ日時、場所で小雨交じりのなか、開か



ステージでジョンへの思いを語る大島渚さん=ザ・ビートルズ・クラブ提供



追悼集会では遺影を抱いて泣き崩れる姿も見られた

れた追悼集会には満席の 6 千人余りが集まった。ビートルズ時代からのジョンの足跡をたどった 60 分の映像が流れ、ゆかりのあったミュージシャンや文化人がステージで、それぞれの思いを口に出している。映画監督の大島渚さんは「ジョンを主演にした映画の計画もあったのに、叶わぬ夢となった。彼の愛と平和の叫びを快く思わない人たちの悪意が犯人のピストルに乗り移った気がする」。歌手内田裕也さんは「ジョンはロックンロールは現代が生んだ芸術と言っていた。彼が死んでも歌は残る」。音声でメッセージを寄せたミュージシャン加藤和彦さんは「彼は身をもって自分の作品を実行し、素晴らしい人生を生きた」。

集会のラストでジョンのテープが流され、その後、参加者の多くが野音から銀座まで「平和を我等に」などを歌いながら、キャンドル行進した。斉藤さんは女子中学生の言葉が忘れられない。「今まではジョンの後ろについて行けばいいと思っていましたが、これからは私たち自身で愛と平和のために何ができるか考えていかなければと、胸に刻みました」。そう話してくれたという。「若い人たちにこういう思いが伝わった意義は大きく、大切にしていきたいと感じました」

若い世代にジョンのメッセージをつないでいくために斉藤さんたちはさまざまな取り組みを続けてきた。最大のイベントが、オノ・ヨーコさんの提唱で 2001 年から 2013 年まで毎年開催してきた「ジョン・レノン スーパー・ライブ」だ。毎回、日本を代表するミュージシャンや俳優が出演し、ジョンの曲を歌い、平和への願いを込めた「イマジン」の詞を朗読する。第 1 回は米中枢テロが起きた直後で、世界で戦火が広がる最中でのスタートとなった。ライブの売り上げは、学校教育が受けられないアジアやアフリカの貧困地域の子



野音から銀座に向かい、キャンドル行進する追悼集会の参加者。左から3人が先導する斉藤早苗さん＝ザ・ビートルズ・クラブ提供

供のために寄付され、13 回で約 130 の学校建設を支援してきた。今年は「ビートルズ最後の新曲」として、ジョンが生前に遺した「ナウ・アンド・ゼン」が先月、リリースされている。ジョンの歌声に、時を超えて、他の 3 人の演奏を重ね、仕上げた作品だ。斉藤さんは「技術の発達で、今で言うメタバース(仮想空間)での『再結成』『共演』『ハーモニー』だってあり得るんだと、ビートルズがまたしても新たな可能性を示してくれた」と話す。8 日、今年もジョンが凶弾に倒れた日を迎えた。世界が今、新たな分断と対立の時代を迎え、ウクライナやパレスチナ自治区ガザでの戦闘が激化する中、多くの人がさまざまな思い、それぞれの形で追悼の意を示している。斉藤さんはこう願う。「一人でも多くの人々がジョンへの思いを募らせることで、彼の愛と平和へのメッセージが時と国境を超えたハーモニーとなって、世界を駆けめぐったらいいなと…」

◇

開設 100 年を迎えた「日比谷野音」のステージに刻まれた伝説を月 1 回、証言を通じて再現してきました。今回で終わります。文・稲熊均

付記：このシリーズ『100 年の残響 日比谷野音 story』に心から感謝している。この中に多くの人たちの思いが込められていることがたいへんよく判った。筆者としては 1962 年、筆者が高校 3 年生の時に体験した『小澤征爾 凱旋帰国コンサート』をぜひとも取り上げて頂きたくて、メールで要望を送ったのであるが、それは叶わなかった。同氏の若々しく晴れやかな姿と、その時に演奏されたチャイコフスキーの『スラブ行進曲』は今でも深く心に焼き付いている。いまから 60 年も昔のことである。